

総合人間・文化学部の目指すもの

金 田 晋

東亜大学 総合人間・文化学部長

E-mail: kanatasu@po.cc.toua-u.ac.jp

1. 大学論としての総合人間・文化学部

21世紀の学術文化とその担い手を育成するために、日本の大学は今、3度目の自己改革を行っている。第1は明治期から大正期にかけての帝国大学令（1886年、明治19年）や大学令（1918年、大正7年）下での旧制大学の時期であり、第2は第2次世界大戦後の学校教育法のもとに設立された新制大学の時期である。前者がドイツの学制を模範とし、後者がアメリカの学制を模範とするという差異はあるものの、欧米の学術文化、社会制度と産業革命以降に急速に発展した近代的科学技術を摂取することを基本にしてきた。第3の変革の課題は、受信をではなく発信を基本とする大学へと自己改革することである。しかも大声で語ることが発信というわけでない。この変革の意志は、地球大の文化、創造活動におけるポストモダニズムの潮流と深いところで交叉している。

第3の大きな改革のうねりは、大学に関しては1990年代、平成期に入ってしまった。大学の設立や経営を、大学設置基準で細かく縛ることをやめて、それぞれの大学が自己責任において実行してゆくことが求められた。大学が自らの建学の精神に基づいて、自らの教育と研究の理想に向かって、大学、学部の教育研究を推進することが可能となったのである。

改革の要点は、大きく2点にしばられよう。一つは新制大学において、低学年次に教養教育、高学年次に専門教育というふうに固定され

ていた区分を撤廃することである。そのことは、20世紀に特に増進した研究の専門化、分業化への反省をも意味している。事象を専門化し、局部的深化を目指しているかぎり、その事象への責任はいかにして自覚できるであろうか。研究は専門深化の方向と全体性への眼差しの両方をそなえなければならない。その全体性への視点が教養教育に期待され、教養と専門の並存が志向されることになった。もう一つは、従来の学部、学科の枠内では処理できない、むしろ学際性、総合性を標榜する新しい理念をもつ学部が創設されたということである。この時期、環境、国際、人間、情報の名をもつ大学や学部が次々に設立された。いずれも、物と物の関係、物とそれを取り巻く環境を主題領域とする学部である。

私たちの学部、総合人間・文化学部も、「人間」の語を冠せる点で、こうした90年代にはじまる第3の大学改革の流れの中で、同じ精神を呼吸している。しかも上記4つの名称の中で「人間」は、特別な性格をもっている。国際を意味する international は、18世紀から19世紀の変わり目に、マルサスが人口と食料の関係を国家をこえて議論しなければならないとして造語した語であり、crossculture は、文化の多数性が承認されるようになった、特に1970年代以後の事態を念頭においているし、情報は通信のネットワークの問題解明を目指しているが、要するにコンピューターやインターネットが盛んになる1970年代を視野に入れている。環境も、たしかに事態は昔からあったことはたしか

であるが、環境汚染、地球環境が否応なしに私たちの生活に入り込んでくる時代になって登場した概念である。それらに対して「人間」は新しく古い。時代の変革期にはいつも浮上してきた概念である。時代をこえ、文化をこえて、価値観が揺らぐほどの危機の時代に、人類はいつも「人間とは何か」という問いを発してきた。古代ギリシャの時代しかり、ルネッサンスの時代しかり。19世紀しかり。そして20世紀から21世紀へと移ろうとする現代しかり。

しかも私たちは、人間を心身統一の個体としてとらえるのでない。のちに述べるように、私たちは人間を人と人の関係、ネットワークととらえたい。そうだとすれば、情報も、環境も、国際も、人間の諸様相としてとらえることができるであろう。

わが総合人間・文化学部は、経営学部、工学部、法学部、デザイン学部につづく、東亜大学の5番目の学部として発足した。東亜大学の全体構想の中では、自然科学と社会科学と並んで真の人文主義 humanismo を目指す学部として位置づけられている。従来の日本の大学では、人文学をカヴァーする学部は文学部とされ、哲学、歴史学、文学の3領域から構成されていた。また文科系と理科系という区分では、文科系の極北にあるとされてきた。

人文学を標榜するとしても、こうした従来の文学部の枠を破砕して、社会科学や自然科学に向かって開かれた、みずからのうちにその要素をとりこんだ学部でありたい。そのような思いで、総合人間・文化学部はつくられた。実際、教員団には文学や社会科学だけでなく、工学や教育学や理学や医学の学位をもつ者が加わっている。人間の経験し、生産してきたさまざまな事象や功業を総合的に研究するために、定量的分析であれ、現地調査であれ、総合的理解であれ、あるいは文献解読であれ、さまざまな方法を駆使しようとするものである。

2. 人間学あるいは人間科学について

総合人間・文化学部は、「人間とその文化」

の教育研究の拠点、人間科学の建設を唱っている。だがこの名称がたんにプロパガンダのためのキャッチフレーズであってはならないだろう。たしかに人間科学はいまだ新しい学問であり、確たる体系をもっているわけではない。

ヨーロッパには長くアントロポロジー（人間学）の伝統がある。Anthropologica という名称は、ヨーロッパ16世紀に、ルネッサンスのフマニスムと呼応しながら生まれ、近世・近代哲学を通じての系譜をたどることができる。19世紀には自然人類学へと分裂してゆくが、その世紀の後半、哲学的人間学はふたたび活発になる。20世紀はじめ哲学的人間学を提唱したM・シェーラーは、古来のアントロポロジーの類型を、1) キリスト教信仰における人の観念。2) 理性的動物としての人（ホモ・サピエンス）。3) 制作者としての人（ホモ・ファーター）等にまとめ、それぞれの類型を通底する人間学を構想したが、心身合一の個体としての人間観の枠から抜け出すことはできなかった。そうした人間を身体の方面に力点をおいて考察するとき、私たちは「人類学」という訳語が適切なアントロポロジーをえることになる。こうしたヨーロッパ的人間観に対して、和辻哲郎は、本来漢籍や経典において「世間」とか「間柄」の意味につかわれてきた日本語の「人間」という語の中に残存している人と人との間という観点を引き出して、「人間の学としての倫理学」を提唱した。ここでは個人としての人間の社会性が論じられたのではなく、人と人との間という関係性に立脚した倫理学が構想されていた。私たちは、この倫理学をも、東洋的伝統を踏まえた人間学にかぞえることができる。

ではヨーロッパには、人間を社会的関係の中でとらえる視点が育たなかったのか。そうではない。西周は明治6年「生性発蘊」というコント派の哲学体系を紹介するが、その中にソシオロジーというルビをふりながら、「人間学」という訳語を作って、「是亦坤度（コント）ノ創意、ソサイテノ語ヨリ変成スル者、人間相生養ノ道ヲ論シ、其中ニ政事法律教法等ノ科ヲ兼ヌル哲学ナリ」と注を加えている。明治10年ご

るまで、「社会」という訳語は日本にはなく、漢学の素養のある西はソシオロジーに「人間学」の訳語をあたえたのである。同じく西の明治15年頃執筆とされる「尚白劄記」では「社会学」という訳語が見出されるのであるが。

福沢諭吉もギゾーやバククルの思想を学んで、『文明論之概略』（明治8年）を執筆する。その時期、まだ「社会」の訳語は定着していなかった。福沢は、ギゾーの著書が *société* を論じるところで「人民交際」とか「人間交際」の語を使用する。福沢は「封建の時」の弊害を克服する「もっとも有力な手段」は「人と人との交際」だと考えた。*société* という観念は、封建時代のタテの「公」ではなくヨコのパブリックと密接に関連している。けだし日本での「公」の観念は「昔から一般的には君主とか政府とかいう上級の権威」を意味し、「公園の『公』は西洋からの輸入観念」だったと言う。ヨコのパブリックを基礎とする *société* という概念を、日本にどう移し入れるか、それが福沢の思いであったはずである。

以上のアントロポロジーやソシオロジーの訳語としての人間学だけを、私たちは「人間科学」に託しているわけでない。現象学者M・メルロ＝ポンティは1950年頃、かれのそれまでの身体概念を中心にした現象学を幼児の対人関係などの児童心理学等に取り込み、新たな人間科学を構想した。かれの場合、心理学と言語学と歴史学が人間科学の柱となった。M・フーコーは生物学、経済学、文献学等を軸にした人間科学を構想した。ここに、レヴィ＝シュトロースの文化人類学を加えてもよい。メルロ＝ポンティの思想をドイツ的に翻案した現象学者S・シュトラッサーは、これを「人間の経験科学」だと規定する。この経験科学という考え方が重要である。人間科学は、広い意味での臨床研究、現場に赴いての調査研究からはじまる。

人間科学とは、人間とは何かという問いを本質論として立てるのでなく、人間が世界内に生きながら、生活し、また作り出してきた諸事象

について具体的に研究することを目指す学問の総称と言ってよい。

わが総合人間・文化学部を目指す人間科学には、身体の科学としての健康科学、スポーツ学が加わる。現代社会において、健康は自然の老齢化だけでなく、さまざまな環境劣化の被害もあれば、文明病とよばれるものまで、切実な問題になっている。健康に生きることを「環境に適応し、自己の能力を十分に発揮できる」ことだとすれば、そのためにはたんに医学や保健学、生理学、栄養学だけでなく社会学、経済学、心理学、文化学、哲学等の諸学との共同作業をまたなければならないであろう。

スポーツ学もまたオリンピックに象徴される近代スポーツにおいて競技力を高めるために、身体機能の強化の法を、医学、生理学、栄養学といったさまざまな方面から開発されなければならないが、同時に生涯学習としてのスポーツの分野もあり、これは人間学であり、社会学である。

科学技術もまた、すぐれて人間の文化である。現代生活をになうさまざまな電化製品から生活機器に至るまで、コンピューターが埋め込まれている。20世紀初頭、真空管の発明によって無線通信の分野がはじまるが、その後のエレクトロニクスの驚異的な発展は人間の生き方に決定的な影響をあたえた。人間（じんかん）としてのコミュニケーションの世界が高度に花開いたのである。この1世紀を通覧するとき、科学技術の進歩は人類が夢としてしか思い描けなかった世界が現実のものとなり、またそのためにさまざまな歪みを社会現象としてかけることになったのである。

人間科学は、何よりも現代を主題とする学問である。しかしだからといって、現代の時事問題ばかりを追いかける学問であってはならない。現代を巨視的な視点から眺めるためには、人類が営々と築いてきた歴史の栄華と悔恨を学ばなければならないだろうし、人類が創造した文明や文化の華やかな精華を享受しなければならない。

3. テクネーとしての人間科学

専門を支える教養と、スペシャリストを支えるゼネラリストの眼が、21世紀にはじまる科学にもとめられている。そもそも専門と教養、スペシャリスト的知識をゼネラリスト的教養を2分法で考えるべきでない。その区分法のために、これまで学際性、総合性を標榜する学部は、専門性の低い、あるいは薄い学部とみなされてきた。奇妙なことに、全体的視野をもつことが研究推進の阻害要因と見なされることもあった。しかしこれは旧来の学問の分類法からくる誤解である。木を見て森を見ない式の研究の有効性が、今問われている。私たちの学部は、新しい枠組みのスペシャリストの養成を目指しており、その枠組み自体を相対化する眼差しをもっているがゆえに、すぐれてゼネラリストたりうるのである。大衆化時代の大学は、まずよき市民を育てる場所であるべきで、社会をバランスよく生きて行くための良識（ボン・サンス）を磨くところである。人間科学はとくにそうである。

人間科学には、もう一つの、宿命と言ってもよい特質がある。取りあげる事象を、対象化してとらえるのではない。人間を研究する主体が同じ人間だということである。その人間は、思索し、情感し、行為し、創造する。1世紀前、ドイツ哲学界で風靡した生の哲学は、心理学を基礎学としたが、従来の心理学を説明心理学として斥け、あらたに記述心理学を提唱した。それはみずからがその世界に身をおくという仕方では、世界や世界の中の事象に接近できないということである。

従来、大学は専門的な知識（エピステーメー）を学ぶところと考えられてきた。時と所、個別的質料を超越して、純粋な形相としての、すべての場合に真である知識がもとめられてきた。自然法則や数学的真理はその代表例であろう。だがその信念は、自然科学においてさえ揺らぎはじめている。客観的事象といえども、見方によって変わってくる。人間とその文

化を研究する人間科学は一層そのことが当てはまるであろう。人間を総体として突き放して観察するには、観察する主体たる私はあまりに人間的である。その限られた視点から、私たちは個々の経験と観察を積み重ねながら、他の場合にも適用・応用できる知識を獲得する歩みが必要であろう。それを私たちは、アリストテレスの知の分類にしたがって、テクネーとしての知識とよんでかまわない。

生きた人間であるということは、覚醒と睡眠を、労働と休養を交互に繰り返しながら、人を愛しあるいは争い、家族をつくり、創造の行為をおこなってゆく。一人で孤独をたのしむ同じ人間が、仲間と打ち興じることができる。足で大地を踏み、身体いっぱい風を受けて、手を道具へと延長させながら、頭で策略をめぐらす。しかも身体のどこと言えないものもある。心（センス・コムニス）をアリストテレスは心臓にあるとし、日本人も胸に手を当てるが、デカルトは脳の奥にある松果腺だとした。そのような生身の人間が、石や水や空気中の物質と同じ物質から構成され、世界の中に身をおきながら、世界の中の月や風や花や鳥や人に向かって語りかけてゆく。けっして創造主の神のように、世界の外に立って、それら被造物を手玉にとるといったことがない。人間科学には、その視点の位置が大切なのである。

総合人間・文化学部は、そうした人間科学を、学生に教える。その学生も人間である。だから教える一教えられる関係も時に逆転してくる。

4. 知的運動体としての人間科学を目指して

大学は教育が主であると言われる。次世代の知的担い手を育成することが大学の責務である。だが、その通りであるからこそ、私たち自身が未来へ向けてのパースペクティブをもたなければならないし、少なくともそのさまざまなパースペクティブについて、自分たちのあらゆる知識と情報をもちよりながら、議論しなければならない。研究者集団であるということであ

る。

そのような思いから、私たち総合人間・文化学部は研究紀要の発行を思い立った。人間科学は、いま成長過程の学問である。この研究紀要が、既に安定した学部には所属する研究者の個々の研究業績の発表の場所といったものでなく、はじまったばかりの新しい学部が知的運動体として成長してゆくための、言語的表現体、知的葛藤の記録であることが望ましい。

創刊号は、総合人間・文化学部を構成するすべての研究室と教室の、関連分野から「人間」をキーワードにした研究の現状と課題への報告を特集した。研究室でよく議論されたまとまった論述である場合もあれば、いまだ各教員の個人的意見が抜けない場合もある。しかしそれはどちらでもよい。一人ひとりが、正面から人間を問うていることが重要なのである。それぞれの姿勢は、人間を対象化して研究するのではなく、問う自分自身が問われている人間であるという実存的な問いを貫いている点で、共通している。

特集にはもう一つの共通項がある。それは教育と分離した研究を志すのではなく、まさしく教育される学生に語りかける学問として、あるいは学生がみずから主体的にこの研究に参加して行く学問として構想されていることである。

私たちはそのようなものとして、知的運動体としての人間科学を目指して、その出発点に、今立っている。地平が開かれたばかりである。